

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

インドで考えたこと

堀田善衛 著
岩波新書



口上

はじめりは回船問屋

あるときは学生詩人

あるときは大日本帝国国際文化振興会上海事務所

またあるときはアジア・アフリカ作家会議日本評議会事務局長

あるときは芥川賞小説家

あるときは大仏次郎賞小説家

またあるときは哲学者キエルケゴール翻訳家

あるときはミステリー作家アガサ・クリスティ翻訳家

はたまたあるときは「ベ平連」発足呼びかけ人

はっ はっ はっ はっ



しかしてその実態は

.

知の巨人

堀田善衛



*** おことわり ***

この口上中の多羅尾伴内、
七色仮面は堀田善衛とは
何の関係もありません。

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

2. 研二の献辞

この本は私にとっての古典である。書かれたのは今からもう半世紀以上も前の1957年。私がこの本を最初に読んだのは、多分十年位前であったろうか。それ以来、この本は私の座右の書となっている。聞くとところによると、この本はインドに関心があったインテリと自称する人々の間では、当時必読の書のようなものであったらしく私の同世代の人に、読んだことがあるか、と尋くと、半分以上の人がイエスと応えるようなものであるらしい。

お恥ずかしいことに、私はインド滞在二十年位して、初めてこの本に出会った訳である。きっかけは、日本に一時帰国していた時、帰りの飛行機の中で読む本でも何かないと本屋で背表紙を捜していたところ、小さい文庫本で且つ著者の名も知っていたので、買っただけのことだった。その頃の私はインドに関して書かれた日本の雑誌、単行本の、例によって余りに興味本位で本質を欠いた内容に呆れており、インドと名がつく日本の本には成る可く触らないという一種の嫌悪感さえもっていたので、これは私にとって異様な行動だったといってもよい。

ところが読み進んでいくうちに、ムム、この人は仲々わかっているじゃあないか、とその内容の深さと哲学的考察の鋭さに驚き入ってしまった。著者のたった半年間位のインド滞在で、ここまでインドの本質を

見抜くとは、タダものではなかった。翻って私自身のことを考えると、当時二十年もインドで生活していて、この人が半年でみたもの位しか、インドのことが理解できていないということを思い知らされ、一寸恥ずかしいような気さえた。

それにしても、インドという国、私が一種敬意をもって思い返す通り、この本が書かれて半世紀経った現在でも、本質的には今もな～んにも変わっていない、ということを再認識させられるという点でも、この本を今現在読む価値はあると思う。

近年の、インドに関する日本のマスコミの報道や関心のおかげで、インドのことを何にも知らない殆どの日本人は一部のインドで起こっている変化を、あたかもインドの全体像であるかのような錯覚を起こし勝ちだが、インドという広い国は、そう簡単に変わるものではない、否変えることはできない、というのが、インド滞在三十余年にして私がもっている信念である。そしてそれが、そのことが、インドという世界を輝かせている美であろう。更に、この本の著者は、インドという国に行ったことによって、その当時の日本の状況―夏目漱石の言葉を引用し、明治以後の日本の開化というものは、西洋文化を受入れるにあたって、「皮相上滑りの開化である」という点に深く思考を巡らせていることが、私の注目をひくのである。

インドは変わらない、と書いたが、彼等の文化、言っているかどうか分らないがああ国民性というものは、何千年という長い歴史のなかで

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

培われたもので、もうどうしようもないような独自性をもっている本質的なものである。それと照らし合わせて日本を見ると、あの明治も今の平成も変わりなく、周囲の状況に合わせ(引きずられ)、あっちへいたり、こっちへいたり、

いったい日本って何なん？

と言いたいくらいだ。筋が通ったところなど何もありません。それが日本だ！といえばそれまでだが、私としては、余りに本質を欠いた日本という姿が、何だか情けないような気にもなる。良い悪いの話ではないが、このような本を読むと、あれから半世紀も経った訳だが、現在の日本もあの当時と同じような状態だと呆れてしまう。経済、文化面で先進国として標榜しようとする国のようなのだが、果たして精神面では如何なものかと不安になるのは私だけだろうか。

この本の内容の詳しい説明は、インドという国に関心がある人に実際読んでもらい、その人々の評価にお任せすることにして、私が特に印象深く且つ真実だと思った文章を最後に引用し、この本の紹介としたい。

「人間とその生活、文化文明などについて、何等かの意味、あるいはジャンルで、より根本的、根源的なことを考えてみたいという傾向のある人に、私はインドへ行ってごらんください、とすすめる。しかし、とにもかくにもいいころ加減のところ、ホドのよいカゲンのところでお茶を濁して生きすごしたいという人には、インド行をすすめない。後者は、

もし真剣にインドの偉大と悲惨にぶつかったならば、そういうアヤフヤな人生観をひっくりかえされ、もしその人の仕事になにかの意味で精神にかかわりのあるものであったなら、商売は一時的にも営業停止ということになりかねない。」(p.68)

それにしてもこの著者の文章力、流石小説家といってしまうまでもだが、素晴らしいの一言に尽きる。私も、来年あたり、「異境」につぐ第二作目の本を出版しようかと、最近エッセーみたいなものを書いてはいるが、この本を読み返す度に意気消沈してしまう。

私もガンバランばイカンばい。

2013年1月 佐世保にて
馬場崎研二

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

3. 浮世の書評

著者は「はじめに」のなかでわざわざ次のことを強調している。「この手記はインドというものにぶつかって私を感じ考え、また感じさせられ考えさせられたことを、別に脈絡をつけることなくじかに書きしるしてみたものである。理論の筋をととのえる努力もあえてしなかった。」

肝心なのは読んだあとのこと、おおげさに言えば読後の世界観にかかわる事柄なのだが、一見無関心に読者に委ねているかのようなフレーズを置いている。「まあ、読んでみてくれ」ということなのだろう、としておく。

この本を持ち出してきた馬場崎研二もおなじようなことを言っている「この本の内容の詳しい説明は、インドという国に関心がある人に実際読んでもらい、その人々の評価にお任せすることにして、、、」。ここで二人に共通した心の動きが見られるのがおもしろい。「インドのことは説明できないよ」とか「インドのことは自分で感じるしかないよ」というたぐいの本音だ。

ところがそうは言いながら堀田は実に丹念にインド事情を説明し、分析を試み、整理をつけようとする。堀田の出会いインド一つ一つに対してである。なにか整理をつけないことには、どうにも過ごしていけない。インドにおける自分のレゾナードルを再確認しなければならないとい

う、強迫観念にも似た意識があったのかもしれない。その結果として「脈絡のない、理論の筋のおっていない手記」のはずが、インド原素の周期律表とも言うべき成果となって成立している。「まあ、読んでみてくれ」どころか確信をもって「これ全部がインドだ」と断言している。「読んで、これをすべて受け入れて、それを実在として再構築してみろ」と提起しているのだろう。このあたりの厳しさは第二次世界大戦を生き延びてきた知識人ならではと見えよう。

量子力学における多世界解釈では、猫の生きている状態と死んでいる状態が重なった並行世界があるとす。これにたとえて言うと、大戦前の思想家堀田と大戦後の思想家堀田が居る状態がある。それとは別にインドに行く前の堀田とインドに居る堀田という状態があつて、それぞれ並行世界として存在している。読者に着目すると「この本を読む前の世界」と「読んだあとの世界」が重なっているらしい。

これってなんか変くない？

もっとも物理学者たちはこんな言葉の遊びをするために猫を閉じ込めたわけではない。ひとつの現実世界を記述するための量子の物理的な状態は計算上複数(事実上無限)あり、重ねあわさって並存している。どれか一つの状態に確定させることを量子状態の収縮と呼ぶ。この量子状態の収縮は決定論的にはなくたとえ観測する事等、後天的要因により引き起こされるというのがフォン・ノイマンの説だった。

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

これに対し「そんなことありえねーだろー」と言うための思考実験として猫の例をひいたのがシュレジンガーだった。ところが状態の収縮だの並行世界だのについて、さまざまな解釈がとびだしてきてしまった。そう、これもパンドラの箱だったようだ。量子力学での先駆といえば、ヴェルナー・ハイゼンベルクやニールス・ボーアといった面々がうかぶ。みんな北ヨーロッパの寒い国の人の名前だ。雪に降り込められた研究室で生真面目に数式をいじっているのもいいけれど、一度インドに行って、頭を暖めてくると良い。多世界だの並行世界だの、実際にあるんだから、インドには。堀田もそんなことを考えながら、この本をかいたんじゃないだろうか。

脱線はこのくらいにして、(世界の)時代背景というものを含めて考えてみよう。1956年、堀田善衛はアジア作家会議に「日本代表」として参加し、同時に書記局員の一人として現地で多忙な(また多難な)日々を過ごした。このときのインド体験記がこの著作で、1957年初に大任を果し帰国した堀田が1957年の夏に脱稿した。その年の12月には早くも初刷が発売されている。異例の速さとも言える。「理論の筋をととのえる努力もあえてしなかった。」というのは、あながち堀田の謙遜ではなく、実際に推敲する時間が与えられなかったのかもしれない。戦争中に閉ざされていた世界への扉が開かれたことを、いちはやく伝えようとした出版関係者の意気込みが目に見えるようだ。

時間を少しだけさかのぼろう。1955年という年は55年体制として記憶されている年だ。左右社会党が統一し、それに対抗すべく日本自由

党と民主党が保守合同して自由民主党が誕生した。国会においては自民党が与党として君臨した。これ以降の自社二大政党による「保守対革新」の構図を55年体制と呼ぶ。

1993年の総選挙で自由民主党は大幅に過半数を割り、同時に日本社会党も惨敗した。日本新党、新党さきがけ、日本社会党、新生党、公明党、民社党、社会民主連合による連立政権協議が合意にいたり、1993年(平成5年)8月に細川内閣が成立した。単純にはこの時点をもって55年体制の終焉とするが、長期政権下での汚職の増加とそれによる政治不信は以前から徐々に体制を蝕みつつけていた。明らかに変調をきたしはじめていたにもかかわらず、変革の機会を逸しつづけた自社二大政党支配という旧弊は、行き詰まりを打開することができなかった。恣意的でなおかつ誤った財政政策により、投機的金融マーケットに対するコントロールを失い、結果として80年代のバブル経済をまねき、リクルート事件(1988年)をひとつのきっかけとして急速に終焉にむかった。

さて、堀田がインドに赴いたこののち、つまり日本文壇として第二次大戦後はじめて国際会議に復帰した「こののち」は1956年10月に日ソ共同宣言によりソヴィエト連邦(当時)と国交を回復し、それにより12月に国連に加盟した「こののち」でもあった。独立国日本として国際舞台に復帰した第一歩を踏み出した1957年という年は岸内閣発足の年であり、茨城県東海村の原子炉が臨界を達成し、運転を開始した年でもあった。21世紀となった今を国際的、国内的さまざまに規定してい

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

るスキーマがかたちづくられた「こののち」に堀田も新たな視座を獲得したのだろう。

この本の末尾で堀田はボンベイ(現ムンバイ)から眺めたアラビア海の風景について記している。「西アジア、アフリカへと向って広漠として広がり、マダガスカル島までさえぎるものもなくひろがっている」。もちろんマダガスカル島が見えたわけではないだろう。作家としての想像力、もしくはインテリとしての世界観をしてそのような光景を現出したのだろう。それ以降の堀田の活動には地球規模のひろがりが見てとれる。

- 1959 上海にて(筑摩書房)
後進国の未来像(新潮社)
アジア・アフリカ作家会議日本評議会 事務局長
- 1960 香港にて(新潮社)
- 1965 スフィンクス(毎日新聞社)
- 1966 キューバ紀行(岩波新書)
- 1969 小国の運命・大国の運命(筑摩書房)
- 1970 あるヴェトナム人(新潮社)
- 1974 日本アジア・アフリカ作家会議 初代事務局長
- 1977 ゴヤ 全4巻(1974-77)(新潮社)
- 1978 航西日誌(筑摩書房)
- 1979 スペイン断章 歴史の感興(岩波新書)
スペインの沈黙(筑摩書房)

- 1980 オリーブの樹の蔭に スペイン 430日(集英社)
- 1982 情熱の行方 スペインに在りて(岩波新書)
- 1984 日々の過ぎ方 ヨーロッパさまざま(新潮社)
カタルーニア讃歌(新潮社)
- 1989 バルセローナにて(集英社)

強引にこじつければ、極東アジアから出発し東南アジア、エジプトを経てマグレブにたどりついた。そこから世界を眺めている堀田がここにある。1956年日本の再出発からはじまる堀田の逍遥はこののちもつづく。政治学者のように55年体制とか日本の戦後スキーマといった言い方をするのは好みではないのだが、象徴的な著作がある。

- 1992 時代の風音 司馬遼太郎、宮崎駿との対話
(UPU のち朝日文庫)

「ゴヤ」完結(1977)以降、スペインに居していた堀田もふたたび日本と時代というものを語っている。時は流れていった。なんとか体制とか、かんとかスキーマと称したのも、総じて時代おくれになり、齟齬をきたしていた。

- 1998年9月5日 堀田善衛逝去
合掌

